

# 戦後 日本の思想界で 指導的役割を果たした哲学者

**務台 理作**（むたい りさく）

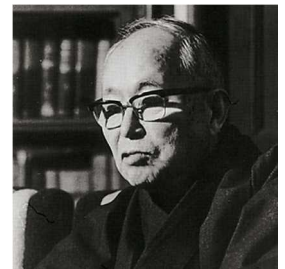
**三郷 野沢 出身**

〈務台理作が活躍した時代〉 1890年（明治23年）～1974年（昭和49年） 享年83歳

| 明治        | 大正        |                 |                 |        |                  | 昭和    |                 |                 |                  |                      |               |                   |                        |                   |                        |                 |           |          |           |               |    |
|-----------|-----------|-----------------|-----------------|--------|------------------|-------|-----------------|-----------------|------------------|----------------------|---------------|-------------------|------------------------|-------------------|------------------------|-----------------|-----------|----------|-----------|---------------|----|
| 23        | 3         | 4               | 7               | 11     | 15               | 3     | 10              | 18              | 21               | 22                   | 24            | 26                | 29                     | 30                | 35                     | 36              | 39        | 43       | 46        | 49            |    |
| 三郷(野沢)に誕生 | 長野師範学校へ赴任 | 京都帝国大学文学部哲学科に入学 | 長野師範学校退職・大学院へ進学 | 大学院を退学 | 南安曇教育会とのかわりが始まる。 | ドイツ留学 | 台北帝国大学文学部教授となる。 | 帰国。東京文理大学教授となる。 | 「場所の論理学」を<br>発刊。 | 教育刷新委員会委員となり教育改革を推進。 | 文部省教育研究所長に就任。 | 兼任<br>東京教育大学教授を兼任 | 慶應義塾大学文学部および大学院の教授となる。 | 「第三ヒューマニズムと平和」を発刊 | 「人間と倫理」発刊<br>「実存の思想」発刊 | 「現代のヒューマニズム」を発刊 | 「幸福の探求」発刊 | 慶應義塾大学退職 | 「思索と鑑察」発刊 | 徳高北小学校の校歌作詞制定 | 逝去 |

## 「第三ヒューマニズム」を提唱。人間を不幸にしているものからの解放と実現に向けて活動

イタリア・ルネサンスを原型とする教養的ヒューマニズム、近代市民社会を作り上げてきた市民的ヒューマニズムに対して、ファシズムと戦うヒューマニズム「第三ヒューマニズム」を提唱した。人間を不幸にしているものとして、戦争・災害・貧困・病気・人間疎外をあげ、人々によるそれらからの解放とその実現について提言した。人類的・社会主義的ヒューマニズムの方向に向かい、思想的課題を克服していこうとした。また、「安保問題研究会」での六十年安保条約締結反対、「憲法問題研究会」での改憲不必要論、ベトナム反戦運動など、いつも良識ある学者や文化人の中心になり、最前列に立って、論陣を張り平和運動に取り組んだ。



…戦後の教育改革の推進… 昭和21年、理作は総理大臣から教育刷新委員に任命され、教育基本法、学制六三制、教員養成、教育委員会設置などの方針を打ち出した。特に、教育基本法の制定に当たり、「個を大事にし、真理と平和を希求する人」をこれからの人間育成の核とすべきであると強く主張した。平和と民主主義をうたい上げている憲法にかなう教育基本法としていくことに骨を折った。

哲学に老年というものはない。目が開かれたそこからいつも新しい歩みが始まるからだ！

理作は、74歳に慶應義塾大学の教壇を去る。しかしながら「哲学は現実に生きる万人のもの」と言い、ますます盛んに雑誌や新聞を通して、自分の考えを発表していった。

## 信州の各地へ哲学の芽を！

大正5年、理作の仲立ちがきっかけで、諏訪・上田・長野の3カ所で西田幾多郎の講演が開催された。これを機に大正9年西田を直接の指導者とする信濃哲学会が発足。以来この会が解散される昭和20年までこの会に関わり続けた。また、各郡市教育会にも哲学会が生まれ、哲学講習会がもたれるようになり、その講師としても年に何回か信州を訪ねた。特に生まれ故郷の南安曇教育会へは、大正12年の夏期講習以来、慶応大学に籍があった昭和37年まで指導者として訪れた。信濃教育会雑誌『信濃教育』には、大正3年から昭和41年までの間、通算27編の論文が掲載された。

〈原点回帰「赤つちの道」〉  
78歳（昭和43）の秋、南安曇教育会と三郷小学校で演壇に立ちました。「小生の哲学はあの赤つち道の哲学です。自分にいちばんふさわしいものです。そのふさわしさがようやくわかり、その一步一步が生涯で一番険阻な峠道になっていることが、晩年しだいにはっきりしてきました。」と述べています。そして、「私は進みましょう。他のことはすべて忘れて。」と青年のような若々しい意気込みで赤つち道の哲学の構築に励むのでした。三郷村教育委員会「赤つちの道」1996

## 校歌にみる ふるさとへの心

〈務台理作が校歌の作詞を手がけた学校〉

- 三郷小学校 三郷中学校
- 豊科北中学校 豊科南中学校
- 穂高北小学校 梓川中学校

（温明小学校 倭小・中学校 豊科中学校 西穂高小学校）

| 3   | 2   | 1                     |
|---|---|-----------------------|
| 自然の幸は<br>西の秀ず嶺<br>いのちとおりて<br>いざやわれらも<br>いのちをうけて | 三郷の里は<br>安曇のひろ野<br>よるところ<br>山河も<br>澄む里ぞ<br>この安曇野の<br>共に立ちなん | 三郷小中学校 校歌<br>作詞 務台 理作 |

参考文献・HP 「赤つち道」三郷村教育委員会 1996  
「務台理作と信州」南安曇教育会務台理作委員会 1991 南安曇教育会  
「場所の論理学」務台理作 1996 こぶし書房刊  
HP 安曇野市「安曇野市ゆかりの先人たち」(<http://www.city.azumino.nagano.jp/yukari/person/254/>)